
アラビアンズ ロスト

黒うさぎ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アラビアンズ ロスト

【Nコード】

N3391X

【作者名】

黒うさぎ

【あらすじ】

——犯罪大国ギルカタール。ギルカタールのプリンセス、アイリンは密かな夢を持つ。しかし、とある試練が——果たして、その夢は叶うのか…！？

：恋愛ゲーム『アラビアンズ ロスト』を二次創作でアレンジ小説にしたものです。逆ハーレム、恋愛物、素人文章が苦手な方はお逃げください（笑）

＊キャラ紹介＊／10／18更新。

＊キャラ紹介＊

○アイリーンⅡオラサバル
18～20歳…B型

この物語の主人公。ギルカターのプリンセスで、夢は普通になること。

強気で、少々我儘な所もあるが、それは親譲り。
カーティスⅡナイルを純粹に尊敬する。

○ライルⅡスルーマン40歳前後…A型

アイリーンの家庭教師。なんらかの事情で足が不自由らしく、若くして杖をついている。そして、かなりの強者。
昔、ロベルトと一緒に旅をしていたとか。
足が不自由とは思わない戦闘力、と作者は言う。

○ロベルトⅡクロムウエル
24～26歳…B型

アイリーンの婚約者候補の一人。
勢力を伸ばすカジノのオーナー。カジノゲーム大好き。朝昼晩カジノでゲームをするインドア派。外に出ると、太陽の光が眩しすぎて

死にそうになるのです。カジノでのイカサマは達人も超える技で、見抜ける人はいない。かなりの実業家。

見た目なんか胡散臭いが、実は凄いピュアである。小説大好き。

○タイロンⅡベイル

23～25歳…O型

アイリーンの婚約者候補の一人。

ギルカタールの南地区跡取りで、親は大臣。アイリーンとスチュアートとは幼なじみでよく遊んでいた。昔、アイリーンの事が好きだったらしい。スチュアートとはよく喧嘩する。

大柄で頼れる、熱い性格。姉がいるらしい。

○スチュアートⅡシンク

23～25歳…AB型

アイリーンの婚約者候補の一人。

ギルカタールの北地区の跡取りで、親は大臣。同じく、アイリーンとタイロンとは幼なじみ。しかし過去のある理由で二人を避けてしまふ。

タイロンとはよく喧嘩する。

長い銀髪が特徴の性格悪い美男子。女の子がよく群がります。

元祖ツンデレの持ち主。

○シャークⅡブランドン

27～29歳…O型

アイリーンの婚約者候補の一人。

主に商売人と医者をやっている。

商売人ではかなりの実業家で、手に入らないものはない。

医者ではギルカタールで一番腕のいい医者で、病院を経営している。血のつながっていない弟がいる。

服のセンスは：アレだが、多分この候補の中では一番大人である。

○カーティスⅡナイル26～28歳…B型

アイリーンの婚約者候補の一人。稀代の暗殺者で、その腕は大陸一。暗殺者ギルドの長を務める。暗殺者というよりも、ギルカタールでは名が知れているため有名人である。しかし皆は本人を知らない。無駄な殺しはしない主義。

見た目は若くて、平凡な男。本人曰く、人を殺すのがうまいだけの平凡な男らしい。

落ち着きのある、しゃべり方が特徴。

○マイセンⅡヒルデガルド
25～27歳…B型

ミハエルと王宮に居座る、怪しい旅人。『魔法使いとご主人様』の主人公の兄で王族。

アイリーンにお金を貸す、金貸し屋。利子がとても高い。ミハエルを世話する魔法使い。ポジティブお兄さんで、可愛い女の子大好き。しかしミハエルだけがモテるため、屈辱を感じる。

○ミハエルⅡファウスト
歳、血液型不明

マイセンと共に旅をしている。自称、悪魔らしい。目が赤く、見た目も不気味だが、凄い美男子。マイセンよりモテる。しかし、女には興味ないらしい。

カーティス曰く、とても強いらしい。だが無名。

マイセン大好き。好きすぎて、たまにおかしくなる。マイセンの前ではデレデレしまくるが、アイリールなどにはかなり冷たい。

○チェイカ

アイリールの側近。

昔、カーティスに武術を教えてもらっていた。

○アルメダ

アイリールの側近。

チェイカに恋心を抱く。

これからも更新していきたいのでよろしくです！

***プロローグ* (前書き)**

早速のプロローグです。

基本書くの遅いんで、遅れたら申し訳ないです…
楽しんで頂いたら嬉しいです！

プロローグ

——ここは砂漠の犯罪王国ギルカタール。

悪党ばかりが集まる、治安が悪い国である。

——これはこの国のプリンセスのお話…。

私は、アイリーン・オラサバル。

…ギルカタールのプリンセス。

まあ私は何不自由なく暮らしてるんだけど、ただ一つ願がある。

それは普通になること。

普通の暮らしをして、普通に結婚したいのよ。

…え、普通って？

…だって、私の周りには悪党ばかりしかいないし、当然私だって普通じゃないもの。

お父様は元盗賊王、お母様はかなり暴君だし。

盗賊のスキル磨く修行とか、モンスターと戦闘したり、目の前で人が殺されたり：

…まあ、色々普通じゃないのよ。

「お嬢様、さっきから誰に話しかけているんですか？」

「…お茶の間よ」

広い鍛練所の中、私と家庭教師のライル先生しかない。

お茶の間に話しかけているのは、かなり頭がおかしいのだが、今の私は多分おかしい。

鍛練所で、徹夜で宝箱の鍵開けをしているからだ。

…盗賊の基本スキル、鍵開けの練習。

娘を一人前の盗賊に仕上げるため、お父様は家庭教師をつけて私を鍛えさせている。

昨日から全く、この宝箱はびくともしない。

キーピックを上手く使いながら、齒車を回すが…

「…ダメ、開かない…」

疲れはてた私は肩を落とした。

あー、この宝箱をぶん投げてしまいたい…

「もう疲れたんですか？」

背後からライル先生が肩を叩いた。

「疲れたわよ…」

思わず手を止めてしまった。

「手を止めないでください」

しかしライル先生は私に付き合ってくれて、しかもずっと立ちっぱなしだ。

先生のほうが疲れてる、多分。

「…ライル先生の方が疲れてるわね」

そう呟いて、また手を動かした。

ん…？

微かに手応えを感じる。

「あ…！開きそう！」

「本当ですか」

ライル先生は凄みのないリアクションをしたが、そこはスルーして私は手早く作業する。

——カチャ

宝箱は音をたててようやく開いた。

中には少しばかりの宝石類。

「や、やったあ…」

喜びと同時に、疲労のせいか、床に倒れ込んだ。

「さすが、お嬢様。よく頑張りましたね」

ライル先生は私を褒めてくれた。

ん…？

——褒めた！？

ライル先生が…！？

そう、ライル先生はスパルタ教師である。

小さい頃から私の家庭教師としているが、かなりの鬼畜なのだ。

褒めることなど、無いに等しかったのに…

——霰でも降るのかしら。

「なんですか、そんなまじまじと人の顔を…」

ライル先生は怪訝そうに顔をしかめる。

「ライル先生、褒めてくれたこと無いから、珍しいなって思っただけよ」

そこはキツパリ言うと、先生はニツコリ笑った。

…怪しいんだけど。

「だって、お嬢様。この鍵開けの難度は上級ですよ。それを一晩でとくなんて素晴らしいです」

つらつらと誉め言葉を並べられて、なんだか生きた心地がしない。
「あ、ありがとうライル先生」

私は鍛錬所を後にして、王室で1日を過ごすことにした。

王室——といっても、大層なものじゃない。

家具はそんなにないし、色もなんだか地味。

お姫様らしい理想の王室とは程遠い、殺風景な王室。

…でも私はこの部屋が好き。

お風呂で体を綺麗にした後、キングベッドに潜り込む。

「眠たい…」

徹夜訓練の疲労のせいか、重い瞼が徐々に閉じ、深い眠りについた

***プロローグ* (後書き)**

次回はいよいよ本編へ。
アイリーン、どうなる！？

***最大のピンチ到来*（前書き）**

こんにちは。

更新が遅すぎる、素人作者です！（（

はい。

私もピンチ到来です、ヤバイです。

アイリーンもピンチ到来…！？

ご覧ください！！

最大のピンチ到来

次の朝。

「――ター…！」

う…

もう少し寝たいのに…
私は耳を塞いだ。

「…マスター…！」

チェイカは無理矢理シーツを剥がした。

「きゃーっ！」

反射で起きてしまった。

側にはアルメダもいる。

「なんなのよ、もう…！」

低血圧ではないが、昨日は徹夜で疲れているため気分は最悪だった。

「マスター、いいから着替えて…!!」

アルメダはおどおどしながら言った。

「え…？何、どうしたの？」

アルメダの態度に少々戸惑う。

「アルメダ、そんな理由も話さずに…」

チェイカはため息をついて、
私に理由を話した。

「国王様がお呼びですわ、急いでください」

——お父様が…？

なんの用事かしら…。

疑問を抱きながらも、着替えた後、廊下を歩いていた。

お父様のいる謁見室へ向かう。

王室とは別館なので、少し歩かなければならない。

「あれ…」

そういえば、チェイカとアルメダ以外の人達が見当たらない。

皆どこに行ってしまったのだろうか…

嫌な予感が、頭を通り過ぎる。

「謁見室、ね…」

目の前に何カ所か扉がある。

それを開ければ謁見室に入れるが――

「怪しい…」

私は一つの扉を少しだけ開けて、覗いてみた。

案の定、広い謁見室には城のメイドたち、大臣、護兵たちなどがたくさんいる。

お父様は何やら叫んでいる。

「よいか？必ずや我が娘の心を射止めるのだ！」

——我が娘…！？

お父様の娘は私しかない。姉妹だっていないし…

お父様の目の前にいる、黒いローブを纏った五人は一礼した。

顔はちょうど隠れていて、見えない。

——心を射止めるって…；

何を考えているのかしら。

お父様の隣に座る、お母様とふと目が合ってしまった。

…やば…

「貴方」

お母様は気づいて、お父様に言う。

「…アイリーンが」

「…うむ。お前たち、もう下がれ」

お父様が合図をすると、その五人はそそくさと出ていった。

その他の人達も次々と出ていく。

私はその場で動けずにいた。

「おいで、アイリーン」

お父様は笑って、手招きをする。

私は恐る恐る、謁見室に入り二人に近づいた。

「おはようございます、お父様、お母様」

私は礼儀よくお辞儀をしてみせた。

「堅苦しい挨拶はいらんぞ、もっと楽になれ、アイリーン」
お父様は声を上げて笑う。

「そうさせてもらうわ……で、心を射止めるって何よ？」

少し間をおいて、お父様は答えた。

「婚約者だ」

ああ…

そうだろうと思ったわ…。

なんて最悪。

私はため息をついた。

「だってアイリーン、貴方をこのまま放置していたら、結婚なんてできないでしょう？」

お母様は笑ってそんな事を言う。

…う。

否定は、できない。

…確かに今付き合っている異性はいないし、結婚だって無理だろう。

「だからって、勝手に決めないで」

お父様とお母様を睨み付けた。

「…アイリーン、お前は有能な跡継ぎが必要だ。わしらもう歳だから――」

「…誰が歳なのかしら？」

お母様から殺意のオーラが放たれる。

「こ、こほん！ い、いやあ、間違った。私が歳をとってしまったなあ…ハハハ…」

お父様はお母様を一切見ずに、ぎこちなく笑う。

…実際のところ、お母様のほうが強いよねえ。

完全に尻ひかれてるな、と実感した。

「そうよ、アイリーン。そろそろ時期が来たわ。私たちは貴方が結婚してくれないと不安なのよ」

「うう…」

しかし、このままでは完全に両親のペースに乗せられていく。

何とか…何とかしなきゃ…

——頭をフル回転した結果。

思いついた、いい策が。

「…それだったら、フェアじゃないわ」

「…何？」

お父様は顔をしかめた。

だが私は続ける。

「賭けをしましょう？…お父様とお母様は私が結婚しなきゃ、何もできないから不安なのよね？」

だから私がそれを証明するために——」

すうつと息を吸った。

「25日間で100万G集める」

100万G：莫大な金額だが、ギルカタールでは不可能な訳ではない。
なぜ25日間かというと、ギルカタールでは25日という日の区切りは縁起がいいからである。

…頼むから…

のってきて…！

しばらく沈黙になったが、お母様が口を開いた。

「いいわよ」

「えっ!？」

驚いたのは、元盗賊王である。

「ま、待て。アイリーンに賭事なんて――」

「…貴方は黙ってて」

お父様をお母様が制した。

「…アイリーン、本気ね？」

…普通じゃない。

でも――

「やるわ」

その途端、お母様はニヤリと笑った。

「何を賭けようかしら。もし貴方が賭けに負けたら……即結婚よ。」

「勝ったら…私を自由にして」

私は付け足した。

――自由になって、普通になる。

それが私の夢だもの。

「賭け内容は、1000万Gを25日間で集めることよ」

ん…？

まてまて？――

「今なんと？」

「だから25日間で1000万Gよ」

ご満悦な笑みで、さらっと言った。

「なんで二桁増えたのー！！？」

「100万Gなんて容易いものよ。1000万Gぐらい集めないで、
私たちは安心できないわ」
叫ぶ私に残酷なお母様は言う。

「因みに、負けた時の結婚相手は私が決めるわよ」

更に残酷なお母様は高笑いをする。

そんなああああ…！！
なんて酷な母親なんだ！！

お父様は青い顔でそれを見ていた。

…てか助けてよっ！！

こうして、絶対に負けられない賭けの始まった――

***ロベルト編一序一*（前書き）**

ロベルト編から攻略です!!

作者の二番目に好きなキャラのロベルト君。

胡散臭い、クールな見た目、様々な意外性がある不思議ちゃんでもあります。

そんなロベルトとアイリーンのお話。

ロベルト編一序

ロベルト編

私はしぶしぶ、王室へ戻っていく。

…もう、最悪。

…なんでこんなことに。

重い足を引きずって中庭の廊下を歩いていると、気配を感じた。

「…誰？」

私は振り返らずに、言った。

「俺です」

聞き慣れた声で、誰だかやっと分かった。

「…ロベルト」

振り返ると、ロベルトが立っていた。

「さすがプリンセス、分かったんですね」

「当たり前よ、誰だと思ってるの」

ロベルトは苦笑する。

私とロベルトは結構前から知り合っていた。

ライル先生はロベルトのお友達？らしいので、たまに鍛練所に来ては一緒に話をしたり、訓練したりしていた。

見た目の胡散臭さは…どうも好きになれないが話はできる、一応。

「ロベルト、なんでここにいるのよ」

普通に疑問である。

ライル先生に会いに来たのだろうか。

「あ、プリンセス知らなかったんっすか。俺、婚約者候補なんです」

…え？

ロベルトが？

「ええー!？」

「普通に驚いてますね…」

ロベルトはため息をつく、近くの柱にもたれかかる。

「普通にビックリよ、ロベルトが婚約者候補だなんて…！頭がおかしくなっちゃったの！？」

てことは五人の婚約者候補のなかの一人はロベルトだ。

「…いや、おかしくなってますって。王からご指名ですよ」

ああ、やっぱり両親の好みか…

ロベルトはギルカターの巨大なカジノの経営者だけでなく、世界中にあるカジノを経営している、実力者。

莫大な資産と、誰も見破ることができないイカサマを持つ若き青年である。

ま、詳しくはキャラ紹介を見てちょうだい。

「…：そういや、プリンセス。賭けをしてるらしいですね」

「なんで知ってるのよー！！？」

ロベルトに伝わっているってことは、相当広まっている。

「王から言われましたよ、手助けをしてやれって」

「へー…」

お父様、さすがというか何なのか。

とりあえず同行する人がいるので一安心。

「じゃあ、明日から同行してくれるかしら？」

「勿論。協力しますよ」

ロベルトは丁寧にお辞儀した。

***ロベルト編*外に出たら死んじゃいますって…! (前書き)**

ロベルト編の1日目。

カジノごもりのお話ですね、つまらないかもです (↑)

***ロベルト編*外に出たら死んじゃいますって…!**

ロベルト編

—1日目—

昨日は早めに寝たわけで、早起きをした。

シャワーを浴びてから、服に着替える。

…私の勝負服。

派手すぎない、シンプルなドレスを纏い、髪に青いベールをつける。

「よし」

両頬をぱちんと叩いた。

うん、気合いで何とかなるわよね…!

「じゃ、行ってくるわ」

側近のチェイカ、アルメダは心配そうにしていた。

「大丈夫ですか…？ マスター…」

アルメダは落ち込む。

「何でアルメダが落ち込むのよ…」

私はため息をついた。

…でもそんなアルメダやチェイカが好き。

「マスター、頑張ってください。応援してますね」

チェイカは言う。

「ええ、行ってきます」

私は王宮を歩いていると、入口付近でロベルトを見つけた。

「おはようございます、プリンセス」

スラリとしたその影は遠くでもわかる。

「おはよう、ロベルト。行きましょ」

ロベルトの手を引くと、彼は止まった。

…え？

「どうしたの？」

「え、あ、あの…」

ロベルトは帽子の縁を恥ずかしそうに下げた。

「…そ、外に行くんですか？」

「あー…まあ、砂漠でまずモンスターを倒して経験値を上げようかしら」

郊外の砂漠やオアシスには様々なモンスターが住み、宝箱が落ちている、もってこいの場所。

何故経験値をためるかというと、経験値を持っていればモンスター狩りの仕事ができるようになる。

つまり、仕事をしてお金が沢山ためれることができるのだ。

「経験値を上げて、仕事をするわよ。砂漠にも宝箱が落ちてるし」
するとロベルトが、

「…ダメです…！」

首を振る。

――は…？

「外に出たら死にますってー！！」

…はあああつ！？

「何言ってるのよー！！？」

無理矢理外に出そうとするが、ロベルトは抵抗した。

「太陽の光で具合悪くなっちゃいますよ…！！カジノがいいです、カジノ！！」

子供みたいに駄々をこねる、ロベルト。

私は頭を抱えた。

…そもそも、男の選択を間違ったわ…

「あのねー…ロベルト…外に出て死んだ人はいないわ」

うん、多分いない。

…いや、いない。

「カジノの方がいいですって!!俺、オーナーですし…!!」

ロベルトは両手を会わせてお願いする。

そして、迫ってきた。

「…ま、待って…!!近っ!?!分かったから…!!」

するとロベルトはキラキラして、私の手を引いた。

「そうこなくっちゃ!さ、カジノに行きましょう!」

「ち、ちょ待って…」

———なんだか、振り回されてる気がするんだけど。

昼間なのに目がチカチカするようなネオンが溢れ、賑わうカジノ。

ロベルトと私はカジノに入っていた。

「よお、頑張ってるか?」

ロベルトは近くにいる従業員に声をかける。

「あ、はい…」

従業員は丁寧にお辞儀をしてから、隣の私を見た。

驚いたように目を見開く。

「マスター…の、彼女ですか…？」

「んなわけねえだろ…お前、減給な」

ロベルトがさらっと言うと、従業員は「そんなあ」と青い顔をする。

「…あ、プリンセス。何やります？」

「んー…そうね…」

辺りはスロット、テーブルゲームやナイフ投げ…

ーナイフ投げ？

「…ナイフ投げなんてあるのね？」

カジノは行ったことがあるが、ナイフ投げなんて見たことなかった。

「…やってみます？」

ニヤリと口角を上げて笑った。

——完全になめてる。

「やってやるわよ」

カチンときた私はナイフ投げコーナーに行き、ナイフを持つ。

…こう見えても、戦闘力は一般人より高いのよ？

「プリンセス、賭け金は何Gにします？」

——あ。

や、やばい……

「そういえば、お金持っていないんだわ……」

「な、何ですか！それ」

ロベルトは吹き出した。

そもそも、0Gから始まるので今の所持金は0Gだ。

…しまったあ……

「てかロベルトのせいよ！砂漠嫌だっていうから……！！」

あまりにもロベルトが笑うので、言い訳をしよう。

「なんで俺のせいなんスカー!!?!?プリンセス酷い!!?!」

「ロベルトがカジノ、カジノって言うから!!」

ガミガミ言い合う様子を、カジノのディーラーは青い顔で見ていた。

「あーもう、いいです…オマケしますから」

ロベルトはディーラーに何やら言う。

「やっていいですよ」

「え、本当!?!」

私はナイフを構えると、出てくる的にナイフを的確に当てた。

…はずだが――

「あれ!?!?当たらない…!」

ナイフを投げるが、的を通りすぎたり、的が動いたりしてなかなか当たらない。

「あー…もっとスピードが必要ですよ、あとコントロールですかね

…頑張ってください！」

私が投げているのを見て、ロベルトは言った。

「女の子に無理言わないでよ…!!」

手を動かしつつ、文句を言う。

時間が過ぎたので、ゲーム終了となった。

…結果は悲惨。

当たったのは2つだけだった…。

…お金賭けてなくて良かった…。

「プリンセス、逆に凄いですね」

おー…とロベルトは感心。

「ロベルト、ぶっ殺されたいの…？」

奴の襟首を掴む。

「いやいや…違いますって。…それより、俺の見ててください」

ロベルトはナイフを取り、数本構えた。

ゲームが開始されたと同時に、数本のナイフが放たれると全部の的を的確に当てる。

次に出てきた的も、その次も…。

「…うわ。すごっ…」

その技に見とれるほど、華麗なナイフ投げである。

「ちよろいもんですよ」

なんて言いながら、的を全滅させている。

ゲームが終了したところには的が全部無くなるという始末。

ディーラーは「ご勘弁を…」とロベルトに頭を下げる。

「今日は俺が客ってことで。お前も減給」

手柄を客に取られれば、ディーラーは減給らしい。

「うう…酷いですよ、オーナー…」

「そんなんなら、難しいナイフ投げでも何でもやれって」

青ざめるディーラーを無視して、ロベルトは私の肩を寄せる。

「…俺が教えますよ」

耳元で囁く。

「え…」

その日、私とロベルトはカジノでゲーム三昧だった…。

***ロベルト編*外に出たら死んじゃいますって…! (後書き)**

次は金貸し登場!?

***ロベルト編*それモンスターです、プリンセス。(前書き)**

ロベルト編2日目。

25日間をやっていたらきりがないので、何日かとばして書くので
よろしくです！

え、めんどくさいだけじゃないかって？

はい、そうです。

…砂漠でのロベルトとアイリーンのお話です！
どうぞ。

***ロベルト編*それモンスターです、プリンセス。**

ロベルト編

—2日目—

あー…

昨日はずっとカジノ三昧だったため、目がかなり疲れていた。

「金貸し屋はどこかしら」

昨日、お金がなかったのでとりあえず借りにいくことにした。

お母様が客室にいるとか、なんたら言ってたけど…

客室をしばらく歩いていると、誰かに後ろから声をかけられた。

「あ、プリンセス」

「!?!」

聞いたこともない声に驚いた。

…てか誰よ!?

「金を貸しに来たんだろ? 来いよ」

その男は一見、何かの魔法使いの恰好だった。

「ええ…」

不安を感じながら、客室に入った。

途端に…

「ようこそー! プリンセス、俺はマイセン。よろしくな!」

マイセンは握手を求めてきたので、握手をした。

そのテンションは今の私には吐き気がしたが堪える。

「わ、私はアイリーンよ」

何となくお辞儀をした。

「ほーら、ミハも挨拶しろ」

マイセンの隣にいる、黒い男は端正な顔をしかめた。

「え…挨拶ってしなきゃいけないの」

「俺が言っただ、しろ」

マイセンが命令すると、美しい男は私に挨拶…というより、自己紹介をする。

「僕は、ミハエル・ファウスト。父はベリト卿、僕はその息子のあ——」

「だああつ、ちょっと待て!!」

マイセンはいきなりミハエルを妨害した。

そして私には聞こえないぐらいの小声で何かを話している。

「何してるのよ…」

「まあ、そんなことだ! お金、貸してやるよ」

私は10000Gを借りることができた。

「利子…高いわね…」

私が呟くと、

「高利貸しってやつだ。プリンセス可愛いから、初日はオマケしと

くぜ」

ちゃらっとそんなことを言う。

「あ、ありがとう」

私は客室を後にした。

「ロベルトー」

またロベルトは王宮の入口付近で待っていた。

「あ、プリンセス」

ロベルトは手を振る。

「今日こそ、砂漠に行ってもらおうわよ」

「…覚悟はしてましたよ…さ、行きましょう」

ロベルトは苦虫を噛んだような顔で外を歩いた。

そんなにお外が嫌みたいね…

太陽が煌々と輝く砂漠。

また灼熱の気温に襲われる。

「うわぁ…あっちい」

ロベルトは上着と帽子を脱いだ。

「でも、思ったよりは大丈夫じゃない？」

死ぬ！！とか言ってた割には大丈夫そうに見えるが…

「プリンセス、こう見えてもインドア派にはキツいんですよー…」
と、他愛ない会話をしていると…

チャララーン♪

モンスター、砂ねずみが現れた！！

「あ、可愛い」

ペットショップにいる小動物みたい♪

私は屈んで、じっと見詰めた。

「きゃー！持って帰りたい！可愛いー！」

「違う違う！！プリンセス、それモンスターですから！！ダメですって！！！」

ロベルトは私の手を引く。

「何言ってるのよーこんな可愛いモンスター、いるわけないでしょー」

その時、私の人差し指が、がぶっと噛まれた。

「きゃー！！？」

「プリンセス！！」

ロベルトは短剣を抜き、一撃で砂ねずみを斬った。

あえなく、砂ねずみは倒れる。

「ごめんなさい、ロベルト…」

「いいからじっとしててください」

あまり大したことではないが、指からは血が出ていた。

しかし、指先から痺れるような感覚がする。

「痺れるわ…動かない」

「…毒ですね」

するとロベルトは私の指を口に含んだ。

…!!??

「ちょ、何してるのロベルト!」

「毒を抜いてるんです」

ロベルトは私の毒を吸うと、吐き出した。

痺れは大分収まったようで、指は動くようになった。

「…ありがとう、ロベルト」

「いえいえ。でも、あのねずみはモンスターですからね? 注意して

「くださいよ？」

ロベルトは苦笑いをする。

「ええ、分かったわ」

それから夕方まで、砂漠で探索をしていた。

「じゃあ、プリンセス。また明日」

「ええ、また明日」

王宮で私とロベルトは別れた。

***ロベルト編*純粹ねゝ byアイリーン (前書き)**

ロベルト編5日目。

すみません…!

見事に3日とばしやりましたb

まあ、5日目も大して展開はありませんが… (↑)

ではご覧ください!

***ロベルト編*純粹ねゝ by アイリーン**

ロベルト編

—5日目—

——私たちは今、砂漠にいる。

最近は大分、力がついてきたような気がする。

砂漠のモンスターに勝てるようになってきた。

「私、最近力ついてきたと思わない？」

隣で砂漠を歩く、ロベルトに訊く。

「まあ…。最初よりは力がついてると思いますよ」

モンスターと戦う、と言ってもたまたにロベルトに手伝ってもらうが。

太陽が真上に昇り、昼間になると、いよいよ暑さはピークに達する。

足取りも重くなってきたので、一旦休憩することに。

「疲れた…」

汗だくの額を布で拭い、水筒の水を飲もうとしたが：

「…あれ、水がないわ」

もうすっかり空っぽである。

…一滴もない。

——最悪だー！！

「プリンセス？水が無いんですか？」

ロベルトは水が無いことに気がつく。

「俺のあげますよ」

ロベルトは汗を拭きながら、私に水筒を差し出した。

「いいわよ、大丈夫だから」

ロベルトの水を奪うのはあまりにも酷いので遠慮する。

「いいえ、飲んでください」

逆に押しつけられる。

「脱水症状になったら危険です、飲んでください」

「だって、ロベルトは…？」

するとニコリと笑って、

「俺のことはいいです」

と、水筒を私に持たせた。

…まあ、そこまで押すなら…。

「…ごめんなさい、頂くわ」

水筒に口を付けると、美味しくて冷たい水が喉を通る。

身体が一瞬で潤う。

水筒をロベルトに戻した。

「ロベルトも飲みなさいよ」

私が言うと、ロベルトはどぎまぎした。

「え、あ…はい」

——どうしたのかしら。

私は首を傾げる。

ロベルトは恐る恐る水を飲むと無言になった。

「ロベルト？」

「あつ、いや何でもないっス、何でも…」

赤面する顔を隠すようにそっぽを向く。

————あー、分かったわ。

「…間接キスでしょ？」

私がそう言うと、ロベルトの肩が飛び上がる。

「あー凶星ね」

「ばっ馬鹿にしないでください」

これはこれは…

笑えるわ。

「純粹ねーロベルト」

「っっ」

赤面するロベルトは見たことがなかったので、ちょっと新鮮。

…てか、間接キスで赤面とか、中学生か！！

そこがピュアである。

あ、もしかして…

「ロベルト、ファーストキスはもしかしてまだなの？」

と言うと間をあけて、ロベルトは答える。

「この歳でファーストキスって…！俺だって彼女だって何人かいたんですからっ…なめないでくださいよ」

——ズキン

ロベルト、彼女とキスしたんだ。

胸の奥がチクチクする。

え！？何言ってるの、私。

彼女とキスするなんて、当たり前じゃない——：

「あれ、思考停止ですかプリンセス？」

どうやら私はロボット並に一時停止してたらしい。

ブンブン首を振ると、

「や、何でもないの。：行きましょ」

私は気を紛らわすかのように、歩くのに集中した。

「宝箱だわ！」

しばらく歩いていると砂に埋もれた宝箱を発見。

「これ開けますかねー？」

「任せなさい！」

私はバックに入れてあるキーピックを取り出すと、鍵開けの作業にとりかかった。

わずか3分程で宝箱は開く。

「おお…」

解錠の早さにロベルトは感心していた。

「中に何入ってるのかしら」

チャララーン♪

何かの毛皮を手に入れた！

「…いらなっ！激しくいらないわ！！このアイテム！なんでGじゃないのよ！…あと、何かって凄い気になるんだけど」

私は毛皮を砂に叩きつけた。

「あー、それ結構売れると思いますよ。俺、商人じゃないから分からないですけど」

ロベルトは毛皮を拾い上げ、触った。

「…じゃあ持ち帰るわ」

売れるならいいやと、持ち帰ることにする。

日も傾き始め、いよいよ日が暮れ始める。

砂漠は急激に気温が下がり、肌寒くなった。

帰り際、寒くて耐えられない時、今日の毛皮を思い出した。

「あ、これを羽織れば…」

毛皮のコートの完成。

「おー…その使い方がありましたか。凄いですね」

「でしょー？」

毛皮、案外役に立つじゃない。

「明日はどこ行きます?」

ロベルトはふいに訊いた。

「お金貯めるために、カジノとか…」

私が言うと、彼はニコニコして

「それじゃあ、明日が楽しみです」

なんて言う。

…また、明日も誘ってください。

そんな些細な会話が胸に焼き付いた。

***ロベルト編*あ、引きこもりでしたか(笑) byライル(前書き)**

ロベルト編7日目〜!!

2日もとばしちまったぜーやばいんだぜー長いんだぜー

という訳で、本文が長くなってしまい、面倒くさいことに…

しかしライル先生が登場!?

ロベルト君との接点はプロローグをご覧ください!

***ロベルト編*あ、引きこもりでしたか（笑） b yライル**

ロベルト編

一 7 日目一

カーテンから漏れる光によって、ぱっちり目が覚めた。

なんだろうか：最近、どうもおかしい。

「はあ…」

ため息をついて、王室のバルコニーからギルカターの街を眺めた。

「マスター、ご飯の用意ができました」

チェイカはドアをノックして、ドア越しに言った。

「分かったわ」

着替えると、いつものように部屋を出た。

「マスター、行ってらっしゃい」

アルメダ、チェイカは手を振る。

「…行ってきます」

…あれ。

ロベルトがいない。

いつもいるはずの場所にロベルトはいなかった。

…なんでだろう…

カジノに行ってみようかしら。

私は他に誘う人もいなかったなので、一人で王宮を出た。

ロベルトのカジノは相変わらずギラギラしている。

「う…目がやられるわ…大分慣れたけど…」
そんな事を呟きながら店内へ入る。

するといつものディーラーと目が合った。

「おはようございます。」

「おはよう、ロベルト知らない？」

私が訊くと、ディーラーは答えた。

「オーナーは睡眠中でございます」

…なんですって!?

私が呆れ顔を見ると、ディーラーは深々と頭を下げた。

「すみません、オーナーは昨日の夜から仕事詰めで……起こしてま
います」

そっか…

私の同行に付き合ってくれる反面、仕事も溜まる。

それを一夜漬けで……

——ごめんね、ロベルト。

「いいの、寝かせてあげて」

と、言おうとしたが、既にディーラーはロベルトを起こしに行っていた。

あ——…起こさなくていいのに……

その時、

裏口からの凄い叫び声が聞こえた。

——ええ……!?

しかし周りの人は構わず、ゲームを続けている。

…どうしたのかしら。

するとディーラーが裏口から出てくる。

「すみません…オーナーは寝起きが悪くて…」

ディーラーは服が乱れ、頭から血を流している。
実にヤバい状態であった。

「…大丈夫？ ナイフ刺さってるけど…」

頭にナイフがぐっさり刺さっている。

「ええ、大丈夫です…」

とディーラーは笑うが、なんか痛々しい。

ロベルトは寝起きが悪いので、いつもこんな感じだという。

…しかし、ナイフを投げるって…

「私が行くわ」

ディーラーが可哀想なので私が行くことにした。

カジノの裏口から入ると、カジノとは全く違う高級ホテルのような廊下にでた。

その温度差にも驚きながら、ディーラーに案内される。

そこから更に何部屋も抜ける。

ずいぶんと豪勢ね…

やっと部屋を抜けるとディーラーは立ち止まる。

「ここです」

…1つの扉。

この中にロベルトはいるらしい。

「ありがとう、戻っていいわよ」

そう言うディーラーは戻っていく。

「ロベルトー？ 入るわよ？」

思い切って、扉を開けた。

するとロベルトの部屋が露になる。

「ロベルトー？」

部屋は散らかっているようで、綺麗に整頓、掃除がしてあった。

アンティークなものや、本、古いスロット台や、ターンテーブル。
なんだか不思議な部屋…

部屋は五つあり、一番奥の寝室にロベルトがいた。

「…ぐう」

寝息をたてて眠るロベルト。

なんか、子犬みたい…

何とか笑いを堪える。

惜しいが、起こさなきゃ。

「ロベルト？起きてちょうだい」

私が身体を揺さぶると——…

——一瞬だった。

一瞬で、私に短剣を突きつける。

目にも止まらぬ技。

「…!!」

怖い、というより驚いて声が出ない。

喉元に突きつけられた短剣はそのまま…

「…誰だ、また俺を起こしにきたのか…？」

「…ロベルト、私よ、アイリーン」

なるべく平然として声を出す。

「――…え？プリンセス…？」

ロベルトはやっと目が覚めたようで、我に帰る。

私の顔と、自分の短剣を交互に見た。

それから、

「ええ！！？すつ、すみませんー！！？」

自分でも何が起きたかわからないらしく、かなりパニックっていた。

「と、とりあえず短剣をしまつてちょうだい」

ロベルトは喉元の短剣を急いでしょう。

…それから土下座した。

「プリンセス、すいませんでしたっ…！！」

突然、頭を下げるロベルトに驚いた。

「え！？ちよっ…！顔上げなさい！！」

寝間着のままロベルトに土下座って、私殺されるんじゃないかしら…
一応、権利者でもあるロベルトだし…

「いいから上げて…！気にしてないわよ…！」
頭を下げるロベルトを無理矢理上げた。

「え…許してくれるんですか」

「当たり前よ、許すもなにも、気にしてないわよ…？」

私は笑ってみせると、ロベルトも安心したように笑う。

「…良かった…嫌われてなくて」

ロベルトはぽつりと呟いた。

「え…」

「…いえ、何でもありませんっ…！着替えてきますね」

ロベルトは準備を済ませると、私の手を引いてカジノから出た。

——しばらく一緒に街中を歩いていた。

「あー…すみません、俺の部屋散らかってて」

今更そんなことを言う。

「結構綺麗だったわよ？ロベルトってもっと散らかってるイメージがあったから…」

…まあ、掃除はちゃんとしているような部屋だったし。

悪くはなかった。

「プリンセス、俺の事なんだと思ってんスカ…一応、綺麗好きなんですよ？」

「へえー…」

無関心に返事をする、ロベルトは私をじっと見た。

「…何よ？」

「あの、幻滅…とかしちゃってませんか？部屋汚なかったですし…」

私もロベルトを見つめると、彼は照れるように帽子の縁を下げた。

「私は純粹に綺麗だなんて思ったわ。幻滅なんかしてないわよ？」
そう言うと、ロベルトはホッとした様子。

「それより、お昼食べない？」

「そうですね、俺朝飯も食べてないからお腹空きました」

とある食堂。

有名な腕のいいコックがいるらしく、美味しいらしい。

「ロベルト、何にする？」

メニューを開いて、ロベルトと私は決めていた。

「んーじゃあ、俺はこれで」

ロベルトは美味しそうなハンバーグを選ぶ。

「私もこれにしようかしら…」

結局、私とロベルトは同じハンバーグで。

「…あ、プリンセス。奢りますよ」

ロベルトは言うが、私は遠慮した。

「いいのよ、今の時点で500万G貯まってるし…このままいけば、賭けに勝てるわ」

今の所持金は完全に余裕ができ、マイセン達にもお金を返した。

なぜ500万G程の大金があるかというと、カジノのオーナーであるロベルトのお陰。

イカサマを教えてもらい、大勝しまくったからだ。

「だから大丈夫よ」

「いや…でも、男のプライドってものがあるじゃないっすか」

「なによ、それ…」

私が吹き出していると……

「ああ、こんにちは。お嬢様。」

…ライル先生だ。

偶然、ライル先生もこの食堂で食事をとっていたのだ。

「あ、ライル先生…」

「最近、頑張ってますか？」

ニコニコ笑うライル先生だったが、ロベルトを見た瞬間に顔をしかめる。

「…あ、いたんですかロベルト」

ロベルトに注がれる冷ややかな視線。

「な、てめえ…ライル…」

ロベルトはライル先生を睨み付けた。

「…私は貴方のような野蛮な男とは違って喧嘩はしませんよ？……ああ、野蛮じゃなくて引きこもりでしたか」

「うるせえ、仕事だっつってんだろ…！早く帰れ、気分悪くなる」手で、しっしと追い払う。

「全く……。お嬢様、この駄目男は気を付けたほうがよろしいですよ」

ライル先生は私に言いつける。

…思わず、頷きそうになったのはロベルトには言わないが。

「余計なこと言うんじゃないよ…！さっさと帰れ！」

ロベルトがしつこく言うと、ライル先生は店から去っていった。

「なによー。もう少し話せば良かったのに」

「いちいちムカつくんですよ、アイツ」

そんな事をブツブツ言っていると、食事がきた。

「わーあ、美味しそう」

「本当だ、美味しそうですね」

王宮とはまた違う、美味しそうな料理だった。

「あー、美味しかった」

食後のコーヒーを飲みながら、ロベルトと話していた。

「暇があれば、また行きましょうよ」

「ええ」

すると、ロベルトが衝撃発言をする。

「なんだか…デートみたいですね」

…は？

「え、まあそうね…」

ぎこちなく返事をする。

「プリンセスは嫌ですか？俺とデートって…」

「いいえ？嬉しいわ、とっても」

そう答えた時のロベルトの顔は、本人も気づいてない。

ロベルト編あ、引きこもりでしたか(笑) **b y**ライル(後書き)

長文お疲れさまでした！

次回の展開にもご期待ください！

***ロベルト編*：悩みがあるんです。（前書き）**

ロベルト編10日目キターー！！

おいおい、展開が早いぜ、全く…最近の若者は…（え

シリアス全開です。

10日目にしてシリアスとか…遅すぎるのか、早すぎるのか分かんなくなってきた…！

シャークも登場！まあほんつの一部ですがね（笑）

ドンマイ、シャークb

ロベルト君は無限大のピュアを持っているので、本文を見て「んだよ！！言えよっ！じれったいな！！」と思った人。

彼は仕方がないんです。許してやってください（へ

ほら、貴方の後ろにロベルト君が――――

すみません。

***ロベルト編*：悩みがあるんです。**

ロベルト編

—10日目—

昼間の砂漠にて、私たちは宝箱を見つける。

「あら」

：鍵開けも大分慣れてきたわ。

手早く鍵を開けると、中には50万Gが入っていた。

「やったわ！」

ロベルトにガッツポーズをする。

それを見てロベルトは小さく笑った。

……？

——最近思ったが、ロベルトの様子がおかしい。

何だかボーッとしたり、私と目を合わせようとしない。

「…ロベルト？」

遠くをボーッと見ているロベルトは意識を取り戻した。

「すみません、考え事してて…」

…考え事——？

「悩んでるの？」

「ええ、少し」

…聞いてみようかな。

「何よ、話してみて？相談にのるわ」

私が言うと、ロベルトは首を振る。

「ダメです」

「なんでよー!!」

じゃあ落ち込まないでよ！

私はロベルトの顔を凝視すると、彼は目のやり場に困っている。

「ロベルト、私をちゃんとみて」

ロベルトの両頬を挟む。

「ななななんですかー!?!」

「何で目を反らすのよ?」

ロベルトはジタバタするのを止めて、私に話した。

「…俺、最近おかしいんです」

「は…?」

砂漠の炎天下で頭がおかしくなっちゃったのかしら…

「…もう離してください」

低く唸るような声。

私の顔を見ないで言った。

「…離すわよ」

…もう、いいわよ。

ロベルトなんか知らない。

知らないんだから———

私たちは無言で砂漠を歩いた。

どれくらい歩いたかもわからない。

けど、前のようにロベルトとお話しながら歩く楽しさはなかった。

「…?」

何だか今日はモンスターが少ない気がする。

そして、胸騒ぎ…

そのまま突き進むと、大きな蟻地獄を見つけた。

——な…でかつ…!?

直径5メートルぐらいはある大穴に近づこうとすると…

大きな地鳴りが響く。

「え、え!?!」

「プリンセス! 離れましょう、蟻地獄です!」

久しぶりの会話かと思いきや、こんなことになるとは…。

ロベルトは私の手を引いた。

再び蟻地獄が動き出すかと思えば、大穴から5メートル以上のデカ蟻が出現。

蟻は特殊な叫びをすると、私たちの目の前へジャンプした。

…蟻ってジャンプするの…!?!?

おそらく只のモンスターではない。

「うわ…」

これまで沢山の経験値やレベルを上げてきた。

…私なら、倒せる。

「ロベルト、そこで見てなさい!」

私は剣を抜いた。

…う…

「ダメだわ、倒せない…」

…というかデカ蟻はますます強くなっているような気がする。

体力も底をついていた。

「手伝いますか？」

お父様に戦い手出しはするな、と言われていたためロベルトは何もできない。

「いいえ、いらないわ」

私はキツパリ言うと、ロベルトは一瞬、悲しそうに見つめる。

——え…

……………ロベルト？

しまった——！！

「…あうっ!？」

デカ蟻は隙をみて私に攻撃し、その前足が横腹を貫いた。

「……っ！」

声にもならない。

——熱い、熱い熱い……

焼けるように痛い……！！

ドクドクと血が流れるのが分かる。

鋭利なデカ蟻の前足が突き刺っていた。

「——プリンセス!!」

ロベルトの声は私にもちゃんと聞こえた。

——けど。

デカ蟻は私を見下ろすと、もう片方の前足を降り下ろした。

——ああ。

さよなら。ロベルト、皆…

「でも、どっちみちこれが運命なのよね。仕方ないわ」

ため息をついた。

ん…？ため息？

死んだのに、ため息？

——目を開けると私の前にロベルトがいた。

「…ロ、ベルト…」

精一杯名前を呼んでも、蚊の鳴くような声しか出なかった。

「っ…てめえ…！」

ロベルトは剣でデカ蟻の前足をギリギリに受け止めていた。

…ロベルト…

そこから自分の意識は途絶えた――

――？

「あー、意識戻ったな」

目の前にいたのはシャークだった。

――え…シャーク？？

てことは、ここは病院かしら。

「…ヒットポイント、HPが無くなってぶっ倒れたんだぜ？姫さん覚えてっか？」

あ、そうか。ゲームだからHPなのね。

「傷は…まあ治ったな。明日からまた動ける」

「え！？傷をもう治したの！？」

あんな深い傷を…治すなんて。

「馬鹿、魔法で治したんだよ」

シャークは苦笑する。

私は飛び起きると何もかもが白い部屋にいた。

「まあ、一日安静にしてろ」

シャークは私の頭を軽く叩くと、部屋から出ていった。

私は動けるようになったため、王宮に帰った。

王宮に帰ると、今日の事件は広まってるらしく、チェイカやアルメダが押し寄せる。

「マスター…!! 無事で良かった…!!」

「お怪我は大丈夫ですか!？」

心配されたのをよそに私は乾いた声で、

「大丈夫よ」

と無表情で答えた。

…ロベルトが気になって仕方がないのだ。

私を砂漠から一人で病院まで運び、それから帰って行った、とシャークは言っていた。

「……………」

砂漠で喧嘩っばいことになっちゃったし……

明日、ロベルトに会えるかしら。

「あーあ…」

しかし、昼間のロベルトの態度はなんだろう。

あんな怖い声、初めてだったから…

——ロベルトは私の事が嫌いなのかしら。

思いに更けた夜は、なかなか寝付けずにいた。

***ロベルト編*あんな男の何処が良いんですか… b y ライル (前書き)**

ロベルト編、12日目!!の前編です!!

意味不明なカジノ事件発生。

そこにいる、アイリーンは!?

更新遅すぎる…。

色々ありまして、今に至る訳です。

ギャグとか入ってねえしww

と思う方。

大丈夫です!!後半入れてくので。多分。

…では、お楽しみください。

***ロベルト編*あんな男の何処が良いんですか… b y ライル**

ロベルト編

—12日目—

——昨日、ロベルトは迎えにきてくれなかった。

結局、一人で砂漠に行ってくる羽目に。

——そして今日。

私はまたいつものように王宮を出ていく。

いつもの待ち合わせ場所に着くと、私は辺りを見渡した。

…やっぱり、ロベルトはいない。

「何やってんのかしら…」

小さくため息をついた。

…純粹に寂しいと感じる。

ロベルトごときで何だか悔しい気もするが。

「お嬢様？」

「ライル先生…」

私が王宮の門を出る時、後ろからライル先生が声をかけてきた。

「一人でどうしました？」

「…それより、ロベルト知らない？」
私は先生に訊いた。

もしかしたら先生なら知っているかも、と思ったが…

「…知りませんね」

先生は知らないみたい。

「そう…」

「お嬢様」

先生は私に歩み寄る。

「何？」

「あんな男の何処が良いのですか？」

先生は私に訊いてきた。

…皮肉を込めて。

ロベルトの長所を認めようとしないう世話焼きの友人。

私は苦笑した。

…先生の知らないロベルトだって沢山いるのよ？

「純粹なところよ」

一言、私は告げ、先生と別れて王宮を後にした。

——私は無意識にカジノに来ていた。

ロベルトいるかしら…。

入店すると、またいつものディーラーと目が合う。

…そろそろ名前を覚えてもいいんだけど…誰だったかしら…？

「…おはようございます」

気力を無くしたディーラーの声で、胸騒ぎがした。

「あの、ロベルトは？」

そう言うと、ディーラーは首を振る。

「最近、オーナーがおかしくて…今日はお部屋でずっとお仕事をされております」

ディーラーは寂しそうに目を伏せた。

——『最近、俺おかしいんです』

ふと、ロベルトの言葉を思い出す。

…そんなに悩んでいるのだろうか。

「原因って何かわかるかしら？」

「いえ…私には何も」

ディーラーはお辞儀をしてから、また元のテーブルへ戻っていった。

結局、ロベルトには会えなかった。

「部屋に閉じこもるって…引きこもりじゃないんだから」

ぽつりと呟く。

…これじゃあ、ライル先生と同じことだわ。

カジノを出ようとした。

——その時、何か割れる音がカジノ内に響いた。

「お客様！落ち着いて下さい！」

「うるっせえんだああ！！」

男は、狂ったように叫んだ。

全ての客はその男に注目し、手を止める。

しん、と静まりかえるカジノ。

「この店は全然勝てねえ！！ディーラーの態度もなんだ！？おかしいにも程がある！！」

男は語り始めた。

：おかしいのは自分だということは気づいていないらしい。

皆から冷ややかな視線。

男は凶器を持ち、人質に女性をとっていた。

ディーラーたちも容易に近づけない。

何よ、この男…。

「…なんだあ？」

睨む私に、男は気付いた。

「そこの女あ！！今俺を睨んだらろお！？」

一瞬、男の音量に怯むが、物怖じもせずに私は言う。

「ええ、睨んだわよ。それがどうしたの？」

「このお女あ！！」

男は徐々に私に近づく。

私はそれに後退りする。

「こっちにこい、女！！」

男は次の人質を私にするつもりなのだろう。

——ライル先生から教わった防衛術が役に立つかしら。

防衛と言っても、腕を一本折ることも可能である技。

…かけてやるわよ。

「いいから来いってえ！」

二度言われ、私は男に近づいた。

後ろのディーラーたちは動くが……

「動くんじゃねえ！この女をぶっ殺すぞ！！」

凶器を突きつけられる女性はガクガク震えていた。

その様子を見てディーラーたちは動きを止める。

私が人質になり、女性は解放された。

男はよく見ると二十代後半だろうか。見る限り、若かった。

私を舐めるように見る目は、普通にいやらしい。

胸でも触ったらぶん殴ってやる!!

そして晒し首にしてやるわ!!

…お母様並の暴君。

案の定、男は体をベタベタ触る。

刺激しないよう、まだ男には手を出さない。

「女、なかなかいい体してんじゃねえか」

「貴方の目的は何？」

普通にスルーして率直に訊いた。

「カジノをめちゃくちやにしてやる」

男は私を引き寄せると、凶器を首に突きつけた。

案外人質は怖いもので、いざ、なってみると全身が硬直して凄いや汗が出る。

こんなことなら、ならなきゃ良かった…

強気な自分に後悔した。

突きつける凶器が首から鎖骨へ、傷をつけない程度に降下する。

それに全身が震えた。

「あんたあ、本当にいい身体してんなあ…」

「……っ…！」

必死に声を噛み殺す。
噛んだ唇に血が滲む。

嫌だ嫌だ嫌だ！！

こんなエロ男に触られるなんて、最悪よ！！

——ロベルト！！助けて！

「…おい」

カジノに響く、唸る声。

…あ……………

「ああ？誰だ、貴様。ぶっ殺されてえのか」

男は目の前の知らない男――ロベルトに挑発をする。

「…その薄汚い手をどけろよ」

何ともいえない威圧感に男は勘づいたのか、言葉を詰まらせる。

しかし男は私から手を離さない。

「あんた、それでも離さないんだ？こんな勇敢な奴、初めてみたな」

ロベルトは口角を上げて、ニヤリと笑った。

まさに黒笑。

――怖い。

私からもその恐怖が伝わってくる。

まさに、蛇に睨まれた蛙。

「遺言は何かある？」

「な、何言ってやがる」

男は怯みながらも、私にナイフを突きつける。

…確かにそうだ。

私が男に捕らえられているため、不利なはず。

なのに……

不思議と安心する。

「ぐあぁっ」

男は悲鳴を上げて後ろに倒れた。

悲鳴は一度だけで、男は即死している。

急所にはナイフが何本かざっくり刺さり、ドロドロと血が溢れ出す。

「…即死させただけでも感謝しな。お前ら、こいつ片付けろ」

ロベルトはディーラーや従業員に指示すると、彼らはその死体を素早く運んでいった。

……あの遠距離で。

急所から一ミリもずらさずに投げナイフで瞬殺。

カーティス並の技術である。

「皆さん、続けてください。お騒がせしました」

ロベルトが言うと、客たちはまたゲームを再開する。

再び賑やかになるカジノ。

その音などは耳に入らず、私は血の滲む絨毯の上で、ただ立っていた。

ロベルトに腕を引かれ、部屋に連れられる。

「…ありがとうロベルト」

「……いえ」

彼の顔からは何の感情も感じ取れない。

「怒ってるの？」

「……………」

ただ私を見つめるばかり。

「…ちょっと!!」

「その服、今すぐ脱いで、シャワー浴びて下さい」

ロベルトは間髪入れずに、とんだ爆弾発言する。

——ええええええ!!?」

ってか、まだ早くない…!!?」

「…なんで？」

一応、聞いとく。

「だって、あの男に抱かれてたじゃないですか」

あの男——さっきロベルトが殺した男。

…まあ、抱かれたが。

「他の男の匂いがするなんて嫌です」

そーゆー意味なのね…

一番エロいのは私じゃないかしら…

「でも着替えは？」

「それならご用意します」

***ロベルト編*悩んでた事がやっと分かったんです。(前書き)**

ロベルト編12日目!!の後編!!

あぴゃーーへqへ

展開早すぎだろおお!!

そして更新また遅いだろおお!! ()

や、まだ恋愛完全成立はしていない、片足を突っ込んだだけなのよ。

まだカップルじゃないから大丈夫です (↑

ご安心を。

ここからのラブラブに比べたらこんなの序の口です!!

という宣言。

それでは、どうぞ。

***ロベルト編*悩んでた事がやっと分かったんです。**

ロベルト編

—12日目—後編

「ふう……」

ぬるま湯を全身に浴びてから、髪を洗った。

ロベルトの香り？がする浴室に少々どぎまぎしていた。

…てかなんでこんなことになったのかしら。

——『他の男の匂いなんか嫌です』

ふとロベルトの言葉を思い出す。

え、でも何でかしら。

私も嫌だけど、ちょっと抱かれたぐらいで大袈裟じゃない？

「匂いフェチなんだわ、きっと」

…そうしかないもの。

言い聞かせるように、自分で何度も頷いた。

浴室から出ると、脱衣室に赤いドレスが掛けてあった。

「うわ…高そうなドレス…」

プリンセスの身分である私が言うのもおかしいけど。
それくらい高そうなドレスだった。

…サイズもぴったりで、なんとか入る。

「…ロベルト？」

脱衣室を出てから呼びかけたが応答がない。

…あれ、いない。

まったく、なんなんだ。

シャワー浴びろとか着替えてとか一方的な事を言っておいて、置き去りするのね。

「もう、なんなのよ…」

「プリンセス…?」

隣からドヨンとした声がした。

「…あれ!? ロベルト!? 気付かなかったわ、ごめんね!？」

慌てて謝るのだが、ロベルトはなんだか元気がない。

らしくない、落ち込みオーラが周りを漂っている。

「あー…怪我、治ったんですか？」

特に話すこともない沈黙を裂いたのはロベルトだった。

「ええ。だからこうして来てるのよ?」

「そうですか…」

それでもロベルトは落ち込んだままだ。

悩んだり、落ち込んだり…まったく、忙しい奴だわ。

「どうしたのよ？」

「あの時…俺、プリンセスを守れなかったんです」

ああ…デカ蟻の時のこと？

ロベルトはお父様からモンスターとの戦闘には手出しはするな、と言われてるはず。

なのに、守れなかったって…。

「…だって、あれは私が戦わなきゃいけないし、ロベルトは私を助けて病院まで運んでくれたんでしょ？」

俯くロベルトを私は見上げる。

「さっきも助けてもらったし。感謝してるわ、本当に」

「感謝…ですか」

ゆらりと一歩、私に近づく。

え、何…？

——何何何！？

ロベルトの腕が私を捕らえられて——

きつく抱き締められた。

「…！！」

「俺、ずっと悩んでた事がやっと分かったんです」

抱かれる腕に力が入る。

「好きです、プリンス。あんたの事が」

今度は真っ直ぐに、直球すぎるぐらい私に告白した。

「そこで告白なんだ…」

かなりいいムードだが、なぜ今で告白なのか。

嬉しい…のは事実かもしれない。…多分。

「…返事はいらないです」

——抱き締めて、一方的にそんなこと言うわけ？

…ちよつとムカついた。

「痛」

わざとらしく、私は声を上げた。

「わ、すみません…!!」

さっきまでの大胆さは消えたのか、急に恥ずかしくなって私を離し

た。

「…はあ、ロベルト」

「はい…？」

呆れる私をロベルトは恐る恐る見た。

「一方的に抱き締めて、それはないでしょう？ しかも、返事はいって…何？ 私をナメてるのかしら？」

「いや、すみませんって…！」

うう…と唸るロベルトは参ったとばかりに両手を上げる。

「抱き締め方だって、もうちょっと優しくていいんじゃないの？ いくら緊張してるからって…」

「…いや！！ もう触れないで下さいって！！ 謝ってるじゃないですかっ！！！！」

流石に恥ずかしいらしく、ロベルトは赤面で私を揺さぶる。

「…じゃあ私と欠かさず同行してくれたら許してあげる」

「…え、そんなんでいいんですか？」

呆けてるロベルトに私は「早くしないと行っちゃうわよ？」と急かす。

ロベルトは苦笑して

「わかりました。プリンセスの仰せのままに」

わざとらしくお辞儀をした。

***ロベルト編*悩んでた事がやっと分かったんです。(後書き)**

ロベルトが一方的に告っただけで、アイリーンは何とも思っていないです（－）

今はそんな状態。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3391x/>

アラビアンズ ロスト

2011年10月22日01時09分発行